

「長期・短期自然体験が参加者の達成動機に及ぼす効果の比較」

○関智子（筑波大学）・飯田稔（筑波大学）

岡村泰斗（筑波大学大学院）・黒澤毅（筑波大学研究生）

1. はじめに

中央教育審議会は、青少年に対して1ヶ月以上の長期にわたる自然体験プログラムを積極的に提供すべきであると提言した。この答申を受けて、平成10年に文部省の委嘱事業としては我が国初の試みである1ヶ月間の長期自然体験活動が実施されることになった。活動の主なねらいは、1) 自分に自信を持つ 2) 仲間作り 3) 自然とのふれあい、であった。

この目的は、van der Smissen(1975)が野外教育の効果としてあげる、自己と自己、自己と他者、自己と自然環境との関係に基づいていると考えられる。これまでの我が国の研究では、冒険プログラム、環境プログラムを含む約1週間の自然体験活動が、上記の目的に対して効果的であったことを多数報告してきた。したがって、こういった1週間のプログラムに比較して、1ヶ月の期間がどのような意味を持つのかを明らかにすることは意義のあることと考えられる。

本研究では、自己と自己の関係に含まれる「達成動機」を取り上げて、その変容を明らかにし、1ヶ月間と1週間の自然体験による効果の比較を目的とした。

2. 研究方法

2.1 被検者

長期自然体験の被検者は、1998年7月24日～8月23日に山梨県で行われた社)日本環境教育フォーラム主催のサマーキャンプに全日程参加した小学校5年生から中学校3年生、計25名を対象とした(以下、長期群とする)。短期自然体験の被検者として、宮城県で行われたYキャンプ研究会主催のサマーキャンプ参加者82名を対象とした(以下、短期群とする)。短期群は、長期群の学年の割合を考慮したため、1998年7月25日～7月31日に行われたAコースの参加者33名(小学校5・6年生)と、同年8月22日～28日に行われたBコース参加者36名(小学校5・6年生:14名、中学生:22名)を合わせて、同一群とみなした。なお、統計分析の結果、両コース間に等質性が認められた。

2.2 キャンプの概要

長期キャンプでは、マウンテンバイク講習会・ツアー(1泊2日)、「ファイナルプロジェクトチャレンジ」(6日間)、PA(プロジェクトアドベンチャー)プログラム、フリーチョイスプログラム(3日間)、川遊び、民泊(地元の民家にホームステイ)、水と森のプログラム、沢登りと水質調査、林業体験、登山等が行われた。また保護者の参観を兼ねた「ペアレントデー」、2回の休養日が含まれている。これらの指導には、主に民間野外教育団体である国際自然大学の専任職員および同団体のキャンプカウンセラー養成コースを受講したスタッフがあたった。また生活班は、学年、男女に偏りがないように考慮され、一班8～9人の3班で構成されており、各グループに2名(男女1名ずつ)の指導者がついた。

一方、短期キャンプでは、両コースともに仲間作りゲーム、1泊2日の縦走登山、

個人別選択プログラム等を行った。また、環境プログラムの一環として、Aコースでは林業プログラム、Bコースでは炭焼きプログラムを行った。これらの指導は、主に野外教育を専門とする大学教官、野外運動専攻の大学院生・学部学生が行った。また生活班は、A・Bコースとも学年、男女、経験を考慮し、一班6～7名で編成し、Aコースが5班、Bコースが6班の構成となった。各グループに1名の指導者がついた。

長期・短期プログラムは、共通する活動、指導形態で運営されており、いずれも参加者の主体性、独創性が重視されたものだった。

2.3 検査及び手続き

達成動機調査は、中山（1986）による「社会志向性・課題志向性測定尺度」を用いた。この調査は「達成動機」を、対人関係や他者評価への興味を意味する「社会志向性」（9項目）と課題解決過程や学習活動に対する知的興味を意味する「課題志向性」（9項目）の2つの因子に分けて判断するものである。それぞれの質問項目について簡潔な表現に修正し、「とてもよくあてはまる」～「ぜんぜんあてはまらない」の5件法を用い、達成動機の高い順に5～1点を与え得点化した。なお有効回答数は長期群が24名（96.0%）、短期群が64名（92.8%）であった。

調査時期は、長期・短期群ともキャンプ前（PRE）、キャンプ終了時（POST1）、キャンプ1ヶ月後（POST2）の3回であった。さらに、長期群に対しては、キャンプの全体評価を得るために、キャンプ1ヶ月後の報告会を利用して行った「参加者用アンケート」と、キャンプ後に書かれた参加者の感想文を参考資料として使用した。

3. 結果

達成動機得点の平均値、標準偏差、分散分析の結果を表1に、平均値の変化を図1、図2に示した。

表1 達成動機得点の変化と分散分析の結果

	長期 (N=24)				短期 (N=64)			
	PRE	POST1	POST2	F(測定時期)	PRE	POST1	POST2	F(測定時期)
	M (SD)	M (SD)	M (SD)		M (SD)	M (SD)	M (SD)	
課題志向性	29.79(5.51)	32.00(5.77)	29.88(5.49)	4.88**	29.30(5.53)	29.20(5.52)	28.83(4.65)	10.64**
社会志向性	27.13(6.19)	31.63(5.71)	30.08(4.26)	0.51	27.70(6.73)	26.89(6.74)	28.44(6.45)	3.26*

*p<.05 **p<.01

2つの群（長期群・短期群）と3回の調査時期（PRE・POST1・POST2）を2要因とした2×3の分散分析を行った結果、課題志向性（F(2,172)=3.27, p<.05）および社会志向性（F(2,172)=10.54, p<.001）の交互作用に有意差が認められた。そこで、各要因の単純主効果を分析した結果、課題志向性（F(1,86)=5.40, p<.05）、社会志向性（F(1,86)=11.52, p<.01）ともPOST1水準の群の要因に有意差が認められた。即ち、キャンプ終了時における課題志向性、社会志向性は短期群より長期群が高かったといえる。しかしながら、1ヶ月後については両群に有意な差は見られなか

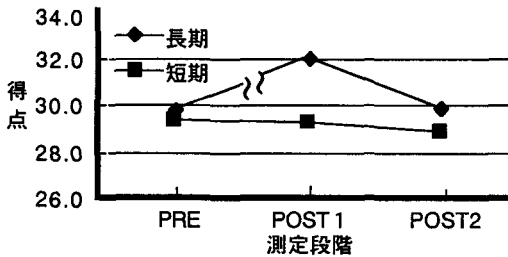


図1 課題志向性得点の変化

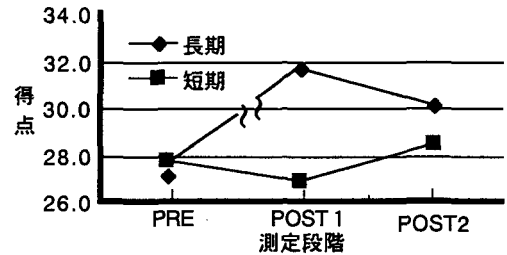


図2 社会志向性得点の変化

った。

長期群における課題志向性の測定時期に単純効果が認められたため($F(2,172)=4.88$, $p<.01$)、LSD法による多重比較を行った結果、PRE-POST1間、POST1-POST2間に有意差が認められた($MSe=7.70$, $p<.05$)。この結果は、長期群の課題志向性は終了時に有意な向上を示したが、1ヶ月後にはキャンプ前と比較し有意差がなかったことを意味する。さらに長期群の項目別分散分析を行った結果、「一度やりはじめたことは、最後までやらないと気がすまない」($F(2,46)=4.34$, $p<.05$)、「すぐにはできないような難しいことに挑戦するのは、できたときとてもうれしい」($F(2,46)=4.70$, $p<.05$)に有意差が認められた。

一方、社会志向性では長期キャンプ($F(2,172)=10.64$, $p<.01$)、短期キャンプ($F(2,172)=3.26$, $p<.05$)ともに単純効果が認められたため多重比較を行ったところ、長期キャンプのPRE-POST1間、PRE-POST2間、短期キャンプのPOST1-POST2間に有意だった($MSe=0.14$, $p<.05$)。即ち、長期群の社会志向性は終了時に向上し、その1ヶ月後まで維持されていたことがわかった。反対に、短期キャンプの社会志向性は、終了時に比べてその1ヶ月後に向上したが、キャンプ前と比較し有意差がなかった。さらに、長期群の項目別分散分析から「自分が書いた文章を、みんなの前で読まれても平気だ」($F(2,46)=7.88$, $p<.01$)、「みんなからグループの代表になってほしいとたのまれたら、よろこんで引きうける」($F(2,46)=4.96$, $p<.05$)、「よその人が来たとき、その人たちを案内していろいろ説明するのが好きだ」($F(2,46)=10.97$, $p<.001$)に有意差が認められたことから、特にこの3つの向上が顕著であったことがわかる。一方、短期群の「よその人が来たとき、その人たちを案内していろいろ説明するのが好きだ」($F(2,126)=3.18$, $p<.05$)、「友だちがグループで遊んでいて、仲間に入りたとき、「入れて」と気軽に言える」($F(2,126)=5.56$, $p<.01$)は、終了時にくらべキャンプ1ヶ月後に向上した。

4. 考察

本研究で明らかになった達成動機の変容は、統計上、長期キャンプの効果を示すものではあったが、これは短期キャンプにおける向上が認められなかったことに起因するものと考えられる。これまでの研究によると、達成動機は1週間のキャンプでも向上したことが報告されており(飯田ら, 1986; 1988; 関根ら, 1996)、その原因としてソロ活動や登山などの成功体験を挙げている。一方、本研究の短期キャンプでは、

メインプログラムの登山において、Aコースでは16時の目的地到着予定時間のところ、2つの班が20時を過ぎたこと、Bコースでは悪天候のため予定されていたソロ活動を途中でやめざるを得ず、撤退したことなどのトラブルがあった。こういったプログラムの変更が達成動機の変容に影響を及ぼしたと推察される。長期キャンプでは、一つのプログラムに支障があっても、それらを取り返すだけの次のチャンスがあるのに対し、短期キャンプではプログラムの延期ややり直しの範囲が限定されることがあるといえる。

長期群の課題志向性では、「一度やりはじめたことは、最後までやらないと気がすまない」、「すぐにはできないような難しいことに挑戦するのは、できたときとてもうれしい」の項目に有意な向上が認められた。参加者用アンケートの中で、約80%が「困難な課題達成への意欲」に対してポジティブな反応を示し、約70%が「参加者の自主性」を認めていたことは、この結果を支持するものであった。具体的には「最も良かった活動」として、第1位に八ヶ岳1周100kmを走破する「マウンテンバイクツアー」(75.0%)、第2位に参加者の自主性を必要とした「ファイナルプロジェクトチャレンジ」(58.3%)が挙げられていた。いずれも、長期キャンプの中では特に困難で、高い主体性を必要とするプログラムであり、感想文の中でもこれらについて特記したものが多かったことから、両プログラムは課題志向性に特に寄与したものと判断できる。なお、1ヶ月後に見られた課題志向性の顕著な低下は、キャンプで経験した困難な課題達成の機会が日常では得られないことや、それに対して自ら課題を設定する能力がまだ備わっていなかったことに起因するものと考えられる。

一方、長期群の社会志向性は終了時に向上し、1ヶ月後まで維持されていた。項目別の分散分析からは「自分が書いた文章を、みんなの前で読まれても平気だ」「みんなからグループの代表になってほしいとたのまれたら、よろこんで引きうける」「よその人が来たとき、その人たちを案内していろいろ説明するのが好きだ」に有意差が認められた。参加者用アンケートでは「集団あるいは対人関係における自己顕示、自己表現」に対して約75%がポジティブに反応しており、この結果を支持した。一方、感想文の中では上記3つについて直接的に書かれたものはなかったが、活動を通して参加者同士のコミュニケーションが高まったこと、仲間の大切さを実感したことを強調しているものが多かったことから、共同生活や活動を通して対人関係への興味が増し、社会志向性の向上に影響を及ぼしたものと推測される。なお、1ヶ月後まで維持されたことは、キャンプ体験で向上した社会志向性を学校の集団生活でも生かすことができたためと考えられる。

以上から、短期キャンプと比較し、長期キャンプの最大の利点として、時間的余裕があること、特に日程の変更や悪条件に対して柔軟に対応できることが挙げられる。本研究の短期キャンプのように、プログラム中に予期できないトラブルが起きても、達成動機の向上に影響が及ぶ可能性は少ないと考えられる。

1週間の短期キャンプについても効果を十分に期待できるが、プログラムが思い通りに遂行できたかどうかによって、達成動機の向上に影響が及んでしまうことが明らかとなった。